



ニュースレター 2014.09 発行 NO.11

一般社団法人エビデンスに基づく統合医療研究会(eBIM 研究会)

理事長 伊藤壽記 事務局長 梅名義昭

大阪大学大学院医学系研究科 生体機能補完医学寄附講座内

〒565-0871 吹田市山田丘2番2号 TEL: 06-6879-3498

URL: <http://www.ebim.or.jp/>

運営事務局: 日本コンベンションサービス株式会社 (担当: 宇田川、中村)

〒541-0042 大阪市中央区今橋4-4-7 京阪神淀屋橋ビル2階

TEL: 06-6221-5933 FAX: 06-6221-5938 Email: ebim@convention.co.jp

第3回研究会学術集会開く 伊藤壽記理事長、山下仁副理事長を選出

8月2・3日(土・日)、『統合医療の実践とエビデンス』をテーマに多彩な報告と異分野交流

2014年8月2・3日(土・日)、リーガロイヤル NCB (中之島センタービル2階)において、第3回の一般社団法人エビデンスに基づく統合医療(eBIM; evidence Based Integrative Medicine)研究会学術集会を、メインテーマ『統合医療の実践とエビデンス』のもとで開催した。参加人数は、175名であった。今回、『統合医療の実践とエビデンス』のテーマに即して、漢方、アロマセラピー、機能的食品、ヨガ療法、緩和ケアなど、様々な医療分野での精力的な取り組みが報告され、臨床データ、エビデンスを構築し、日本型統合医療をつくりあげていく姿が浮き彫りになった。後掲の【ワールドカフェ】などで聞かれた参加者の意見のとおり、異分野交流など当研究会の役割は、ますます期待されている。

また、同日開催された理事会・評議員会において、新理事・監事が選出され、今後2年間の理事長に伊藤壽記先生、副理事長に新たに山下仁先生(森ノ宮医療大学大学院保健医療学研究科長・教授)が選出された。

基調講演では、伊藤壽記先生から『日本における統合医療の在り方について』と題して、統合医療の意義と最近の中央の動き(情報発信事業)を紹介、臨床研究を通じてエビデンスを構築し、我が国の風土にあった日本型の統合医療を開発して

いくべきと強調した。

特別講演では、井上正康先生(健康科学研究所)から、『現代の医食同源学: 抗酸化物の光と影』をテーマに、長谷川敏彦先生(文部科学省科学技術学術政策研究所)から、『人類未曾有の最先端の社会を創り出す研究実験国家日本、その最先端医療の可能性?・・・「生存転換理論」による19世紀医療から21世紀医療への展望』をテーマに、文明史的視点から洞察力のあるお話を聞いた。教育講演では、加島雅之先生(熊本赤十字病院総合内科総合診療科)から『急性期総合診療における漢方の実際と学び方』をテーマに、浦上克哉先生(鳥取大学医学部保健学科生体制御学)から、『アルツハイマー型認知症とアロマセラピー』をテーマに、それぞれ『統合医療の実践とエビデンス』にふさわしい話を聞いた。

話題提供では、慢性閉塞性肺疾患(COPD)の鍼治療、サルコペニア(加齢性筋肉減少症)に対する漢方の効果、精神疾患のリハビリとヨガ・マインドフルネスを取り上げた。

シンポジウムでは、食(機能的食品)と薬、緩和ケアの実践から学ぶスピリチュアルペインへの援助について意見交換した。また、ヨガ療法、アロマセラピー、鍼灸のワークショップが開催され多くの参加があった。

学術集会の概要 (抄録集より抜粋)

特別講演 1

8月2日(土)

『現代の医食同源学：抗酸化物の光と影』

井上正康先生 (健康科学研究所)



生物進化は「一創造百盗作」であり、酸化ストレスによる遺伝子の突然変異を追い風に種の多様性と生存能力を拡大させてきた。ヒトをはじめとする全ての生物は、活性酸素を病原体排除機能や生体制御機構に組み込みながら、海から陸、陸から空へとニッチを拡大して遺伝子を継承する生命のスーパーシステムを構築してきた。本講演では、悠久の生物進化が創成した生命の鳥瞰図を内観し、活性酸素とエネルギー代謝の視点から統合医療における医食同源学の課題を考察する。

特別講演 2

8月3日(日)

『人類未曾有の最先端の社会を創りだす研究実験国家日本、その最先端医療の可能性？・・・「生存転換理論」による 19 世紀医療から 21 世紀医療への展望』長谷川敏彦先生

(文部科学省科学技術・学術政策研究所)



2030 年、日本は「史上最大の高齢者数」を抱え、2060 年には「究極の高齢社会」になる。実は 2060 年頃には日本は 50 歳以上つまり生殖可能年齢を終えた人口「第 3 の人生」が 60% を占める社会、生物種としてはありえない超高齢社会に移行し定

常化する。1970 年頃まで日本は 50 歳以下の人口「第 2 の人生」が 80~90% を占める 19 世紀型の社会であった。現在はその移行期のど真ん中に位置している。私たちは相変わらず 19 世紀型の視点で 21 世紀社会を想定し、混乱しているのではなかろうか。

過去とは全く異なる「断裂的な未来」が想定され、社会を再構築する必要に迫られる。新医学の創出、新健康概念、つまり未来医療を考察する。

教育講演 1

8月2日(土)

『急性期総合診療における漢方の実際と学び方』

加島雅之先生 (熊本赤十字病院総合内科総合診療科)



急性期に対応した総合診療では、カゼや気分障害、心不全といった多岐にわたるありふれた症状・病態から、それらが複雑に絡み合った病態を診療することが求められる。その際に通常の西洋医学では、十分に対応することが難しい場合があまりに多すぎる。これら問題に対して漢方診療は極めて有用であると考えている。現在ともすれば漢方は慢性疾患や不定愁訴への治療と考えられがちだが、漢方の本来の適応は決してそうではない。明治以前、漢方は日本の正当な医学であり、医学の基本的なニードが急性疾患への対応であることを考えれば当然といえよう。特に医療用漢方製剤のおよそ半分が約 1800 年前の急性感染性疾患のマニュアルともいえるべき、傷寒論とその姉妹本ともいえるべき金匱要略を出典としておりその傾向がつよいものと考えられる。当院は年間 6 万人以上の救急総患者数、約 6000 台以上の救急車搬入数がある救命センターを擁し、内科全領域の患者を急性疾患から慢性疾患まで対応している経験から、急性疾患での漢方の実際の使用法を紹介したい。

教育講演 2

8月3日(日)

『アルツハイマー型認知症とアロマセラピー』

浦上克哉先生(鳥取大学医学部保健学科生体制御学)



アルツハイマー型認知症の初発症状は記憶障害と考えられているが、嗅覚障害が初発症状である。病理学的にも、嗅神経にアミロイドβ蛋白が蓄積することが報告されている。アルツハイマー型認知症は神経変性疾患であるので、嗅神経が障害されて、次に海馬の神経が障害されるというように系統的に障害されていく。初期の段階で嗅神経を効果的に刺激できれば、嗅神経の再生を促し認知症の予防ができる可能性が考えられる。アロマセラピーによって嗅神経を刺激できないかと考え、軽度のアルツハイマー型認知症を対象として施行したところ有意な認知機能の改善効果を示した。最も効果のあった組み合わせは、昼用アロマとしてローズマリー・カンファーとレモンで、夜用として真正ラベンダーとスイートオレンジであった。

話題提供 1

8月2日(土)

『慢性閉塞性肺疾患(COPD)の鍼治療とエビデンス』

鈴木雅雄先生

(福島県立医科大学会津医療センター漢方医学講座)

慢性閉塞性肺疾患(COPD)は労作時の呼吸困難のため、日常生活動作やQOL(Quality of Life)、社会生活などの低下を招き、有病率は530万人に至ると推計。その病態は気管支や肺胞の脆弱化に伴い、運動時には気管支の閉塞が認められ気流が低下し、呼吸困難が発生し過度な呼吸運動から呼吸に関係する筋の疲労や筋緊張を起こす。今後、鍼治療がCOPD治療のプログラムの一つとして位置付けられる可能性もあり、COPD患者の労作時呼吸困難の改善に貢献できると考えられる。

話題提供 2

8月3日(日)

『寝たきりを誘発するサルコペニア(加齢性筋肉減少症)に対する漢方の効果について』

萩原圭祐先生

(大阪大学大学院医学系研究科漢方医学寄附講座)



寝たきりの高齢者が2025年には230万人に達すると推計されている本邦では、サルコペニアの予防や治療は重要な課題である。有効な手段としては、現在のところ、筋力トレーニングのみで、新たな治療手段の開発が望まれている。我々はサルコペニアが腎虚の一症状と考え、老化促進マウスに、漢方補腎薬を投与し老化促進マウスの骨格筋への作用を検討した。漢方補腎薬がサルコペニアの治療手段として有効である可能性が示唆されたことから、今後迎える超高齢化社会における漢方補腎薬の可能性について論じていく。

『精神疾患のリハビリとヨーガ・マインドフルネス～作用メカニズムと多元性』

堀内健太郎先生

(リーチュエ ショートケア クリニック)

精神疾患におけるヨーガの有効性について知見が集積されて、うつ病や睡眠障害における一定の改善効果や統合失調症やADHDにおける補助的効果がメタアナリシスで認められている。依存症を中核とした不安や行動の問題におけるマインドフルネスのメカニズムについてGarlandはアロスタシス理論、皮質辺縁～基底核群、前頭前皮質との関連を想定し、1)認知想起的確性を高め、ストレス反応を軽減; 2)ストレス対処としての情動制御を改善; 3)生理学的ストレス反応の撤去; 4)自然な楽しみを味わい、報酬感を向上; 5)依存的行動のスキーマ解除; 6)注意バイアスの修正; 7)神経学的、情動的反応を軽減し、

欲求に気付き、切迫感を制御；8) 思考の抑圧をやめ、条件付け依存的反応の減少を促進、の8つの側面についてまとめている。

シンポジウム 1

「食と薬～機能性食品を中心に」 8月2日(土)

『薬と食の和合による健康科学の実践』

山田静雄先生

(静岡県立大学大学院 薬食研究推進センター)

様々な生体機能が低下している高齢者における多因性関連疾患(生活習慣病など)では、複数の標的部位や経路を考慮したアプローチが重要であり、これには複数の物質による併用療法が必要となる。新研究領域として、「薬」と「栄養・食品」のシナジー(相乗)効果の研究など機能性食品を中心とした健康科学の発展が期待される。健康食品や食品素材の機能性、特に Drug-like effect について、QOL 疾患の排尿障害の改善作用を中心に解説する。

『肥満外来における機能性食品の臨床応用』

前田和久先生(大阪大学大学院医学系研究科)

生体機能補完医学寄附講座)

現在、国内で唯一使用可能な抗肥満薬であるマジンドールは、BMI 35以上の高度肥満患者に保険適応が認められているものの、休薬後のリバウンドや耐性により効果が減退するという問題点がある。最近、我々は抗肥満サプリメントの網羅的解析を行ったが、解析により科学的エビデンスを有すると考えられた機能性食品の抗肥満薬投与時における有用性を検証したので報告する。

1. カプシノイドによる抗肥満薬投与後リバウンド抑制効果 2. アマニによる抗肥満薬の耐性獲得を予防効果の検証

『機能性食品 AHCC が乳癌補助化学療法中の患者に与える影響：これまでの成果と今後の展望』

半谷 匠先生(東京大学生産技術研究所炎症免疫制御学社会連携研究部門)

AHCC は担子菌の一種である *Lentinula edodes* 由来の、アシル化された α -グルカンを中心成分とする機能性食品である。細胞や動物を用いた研究では AHCC が抗癌剤による有害事象を軽減する効果があることが示唆されていた。アンス

ラサイクリンとタキサンを含む補助化学療法を受けた乳癌患者 41 人の有害事象を、AHCC 投与の有無により検討した結果を報告する。

シンポジウム 2

「緩和ケアの実践から学ぶスピリチュアルペインへの援助」 8月3日(日)

『緩和ケアでの出会いから

～スピリチュアルペインを中心に～』

柏木雄次郎先生(関西福祉科学大学)

これまで関西労災病院や大阪府立成人病センターなどで緩和ケアに携わってきたが、看取りを含めた多くの臨床場面に遭遇する度に「生きること、死ぬこと」について教わり、また私なりに考えを巡らせてきた。これらの臨床現場での患者・家族との出会いと別れ(看取り)の具体的な症例にふれながら、患者・家族・遺族の心のケア、寄り添うということやスピリチュアルペインについて述べたい。

『進行がん患者へのスピリチュアルケア

ー看護の視点からー』

田村恵子先生(京都大学大学院医学研究科)

我々は、がん患者に関わる看護師が患者のスピリチュアルな状態をアセスメントし、どのようなスピリチュアルニードを持っているかを明らかにすることを目的に、Spiritual Pain Assessment Sheet(以下、SpiPas)を開発した。SpiPasは村田のスピリチュアルペインの考えと構造を基にし、2段階のアセスメントを採用している。また、診療やケアで活用しやすいよう日常的な会話の表現となっている。SpiPasの使用方法について説明し、そこで得られるスピリチュアルニードとケアの実際について紹介する。

『末期がん患者へのスピリチュアルケアの実際』

沼野尚美先生(宝塚市立病院緩和ケア病棟)

長年、がん患者さんやご家族の方々の心のケアを担当し、勤務する医療者の相談にも乗ってきた。末期状態になった時、がん患者さんは自分の死と向き合った独自の心の叫び(スピリチュアルペイン)を持つ。その叫びを一人ぼっちで抱えるのは辛く、家族と分かち合おうとしても、その受け止め方を知らない家族も多くいる。その時、医療者

がそばにいて、その叫びに寄り添い、心にふれる
関わりができることが期待される。スピリチュア
ルペインに対する実際的ケアについてお話したい。

【ワークショップ】



『ヨーガ療法』鎌田 穰先生、古市佳也先生
(一般社団法人 日本ヨーガ療法学会)



『香りとタッチで患者をケアする臨床アロマセラピー』
相原由花先生
(ホリスティックケアプロフェSSIONALスクール)



『セルフメディケーションとしての鍼灸学』
福田文彦先生 (明治国際医療大学臨床鍼灸学)

【ワールドカフェ】

ファシリテーター 林 紀行先生

(大阪大学大学院 生体機能補完医学寄附講座助教)

出会いと意見交換の場【ワールドカフェ】では
「各分野でがんばっておられる先生方とワールド
カフェで直接意見貢献できたことは本当に有意義」
「ワールドカフェでさまざまな職種の方と出会う

ことができ、心豊かなひとときでした」「多くの医
療従事者の方が医療現場で困っていることがあり、
統合医療が何らかの役立つことを期待しているこ
とが判った」「ワールドカフェは素晴らしい取り組
み。統合医療の発展にはヒトの交わりが大切だとい
う事を学んだ」「みなさんが、統合医療をどのよ
うに考えているか、もっと議論したい」「まだまだ
知らない学問体系などがあるなど感じ、研究のモチ
ベーションが湧いた」「他業種の方の仕事内容をも
っともっと知りたいと感じた」「自分の人生の歩
み方をかえりみる事が出来、良い体験が出来た」
など、今後の研究会に期待する意見が数多く聞か
れた。



(ワールドカフェ風景)

【一般演題 (ポスターセッション)】



【企業展示】



【閉会挨拶】 山下仁新副理事長



■ ご入会のお願い ■ 【eBIM 研究会の会員募集要項】

入会申込書のご請求、ご入会に関するお問い合わせは、運営事務局の日本コンベンションサービスまでお願いします。担当：宇田川、中村

TEL06-6221-5933 Email:ebim@convention.co.jp

会員資格及び年会費は次の通り。

○個人正会員

医師・歯科医師・獣医師（年 5,000 円）

医師以外の医療従事者、研究者（国家資格ならびにそれに準ずる者）（年 3,000 円）

学生・大学院生（年 1,000 円）

その他理事会が会員として適切であると認めた方（年 3,000 円）

○法人正会員 医療法人（一口 10 万円一口以上）

○賛助会員企業（一口 10 万円一口以上）

（以上）

新理事・監事

理事長

伊藤 壽記（大阪大学大学院生体機能補完医学）

副理事長

山下 仁（森ノ宮医療大学保健医療学部鍼灸学）

理事

有光 潤介（千里中央駅前クリニック東洋医学センター）

安部 茂（帝京大学医真菌研究センター）

安藤 朗（滋賀医科大学消化器内科）

井上 智子（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）

今西 二郎（明治国際医療大学附属統合医療センター）

上島 悦子（大阪大学薬学研究科附属実践薬学教育研究センター医療薬学教育研究部）

上原秀一郎（大阪大学大学院医学系研究科小児成育外科学）

太田 美穂（相愛大学発達栄養科）

大野 智（帝京大学医学部臨床研究医学講座）

小川 恵子（金沢大学附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

亀井 勉（長崎大学産学官連携戦略本部）

北川 透（医療法人協和会）

北小路博司（明治国際医療大学臨床鍼灸医学）

木村 慧心（一般社団法人日本ヨーガ療法学会）

越村 利恵（大阪大学医学部附属病院）

小山 敦代（明治国際医療大学看護学部）

阪井 丘芳（大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能治療学）

柴田 政彦（大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学）

杉山 治夫（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）

鈴木 克彦（早稲田大学スポーツ科学学術院）

竹林 直紀（ナチュラル心療内科クリニック）

東城 博雅（大阪大学大学院生命機能研究科代謝調節学）

所 昭宏（近畿中央胸部疾患センター心療内科）

西村 俊秀（東京医科大学外科学第一講座）

野口 緑（尼崎市市民サービス室）

萩原 圭祐（大阪大学大学院医学系研究科漢方医学）

狭間 研至（ファルメディコ株式会社）

平井 啓（大阪大学未来戦略機構）

平井みどり（神戸大学医学部附属病院薬剤部）

前田 和久（大阪大学大学院生体機能補完医学）

安井 洋子（大阪市立大学大学院生活科学研究科・生活科学部）

監事

浅田 孝幸（立命館大学経営学部教授）

野澤 眞澄（明海大学名誉教授）

（2014 年 8 月 2 日時点、五十音順）